

2021年1月3日 説教「信仰、希望、愛」

コリント人への手紙第一 13章 13節

序. 2021年の新年礼拝です。今年の御言葉はコリント人への手紙第一 13章 13節です。コリント人への手紙 I IIは、使徒パウロによって記され、コリント（交通と商業の要所）に設立された教会に宛てられたものです。コリント教会には、当時様々な問題が生じていました。分裂問題、道徳問題、賜物や復活に関する問題など。パウロは問題の本質を説明していきます。今朝学ぶ 13章は「愛の章」として知られています。この愛とは「神の愛」（アガペー）のことです。「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。」で始まるこの章には、愛についての定義が具体的に記されています。「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてのがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して耐えることがありません。」(4~7節)。ここから私たちは、愛についてつぶさに学ぶことができますが、今朝はこの章の結びにあたる部分であり、今年の姉ヶ崎キリスト教会の御言葉である 13節から学んでいきたいと思ひます。



1. 信仰 (13節)

- ①いつまでも残る (13)「**こういうわけで、いつまでも残るものは**」「こういうわけで」がそれまで述べてきたことを受けています。「いつまでも残るもの」は、物質ではありません。なぜならば、見える物はいつか消え去るからです。本当に価値あるものは何なのでしょう。
- ②アブラハムの信仰 (13)「**行け**」と言われ、どこに行くのかわからずにアブラハムが出発しました。結果として、約束の地へと彼は導かれました。しかし、彼自身が求めていたのは、天の故郷であったということをおぼろげに覚えてはならないでしょう。また「**あなたの子孫を祝福する**」という約束をいただいた時に、アブラハムに子供はなく老人でした。しかし、彼は信じました。やがて、イサクを与えられました。アブラハムは見ないで信じたのです。ローマ 4章、ヘブル 11章に旧約時代の民の信仰が記されます。
- ③救いをもたらす信仰 (13)「**人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。**」(ローマ 3:28)とあります。「義と認められる」というのは救われることの一つの意味ですが、それは行いの結果ではなく、キリストを信じる信仰によるのだということです。福音信仰はキリスト教の根幹です。

2. 希望 (13 節)

- ①望みによって救われ (13) 「**私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。**」(ローマ 8:24)。目に見える望みは、生きる者には必要です。しかし、いつも究極的な希望を見る必要があるのです。この御言葉の前には、パウロは「心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます」と記しています。
- ②望みを抱いて (13) 「**望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。**」(ローマ 12:12) 永遠につながる希望をいただくことは大切です。そこに希望を置いてこそ、動かない生きる礎が生まれるのです。そして、様々な患難が起きたとしても、振り回されることなく、忍耐が与えられ、前に向かって進んでいくことができるのです。そして、それを現実的に生きる支えとなるのが祈りなのです。祈りは私たちが主との関係を保つ道であり、命をつなぐ呼吸のようなものです。
- ③失望に終わらない (13) 「**この希望は失望に終わることがありません。**」(ローマ 5:5) この御言葉の前には、患難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望をという順序が記されています。つまり、信仰によって培われて結実させていただく希望は、地上的な希望とは違うのです。この希望に生きるならば、失望させられることがないというのです。

3. 愛 (13 節)

- ①神の愛 (13) 「**神は実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。**」(ヨハネ 3:16)。ここにある愛というのは、アガペーの愛です。一方的恵み、犠牲的、非打算的な愛です。それは、フィリア (相互の愛) やエロス (男女の愛) とは区別されるものです。神は、人間を救うために、御自身が身を低くして、人間のかたちをとってお生まれくださいました。神は、御子が人間の罪の身代わりになって十字架上で死ぬことのために地上におくるほどに、世を愛されたのです。
- ②愛のない者 (13) 「**愛のない者には神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。**」(I ヨハネ 4:8) 私たち人間も神の愛を学びつつ、それを実践する必要があります。その愛を実践することによって、人は神体験的に知ることになるのです。というのも、神は愛なる方だからです。神の愛をもって人を愛するには、神の愛をいただくしかありません。なぜなら、人間からは神の愛は生じないからです。キリストにつながって生きる時に、恵みによってその愛を受けるのです。
- ③愛は恐れを締め出す (13) (I ヨハネ 4:8) 「**愛には恐れがありません。全く愛は恐れを締め出します。**」(I ヨハネ 4:18) 神の愛をいただいて歩む者の特徴の一つは、恐れがないという点があるというのです。病気に対する恐れ、人への恐れ、経済的不安からの恐れ、根拠のない恐れ等。しかし、神の愛に生きる時に、人は恐れないというのです。そればかり、「全き愛」は、恐れを締め出すというのです。

《結論》

今年の御言葉。「**こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。**」13 節全体を覚えていきたいのですが、そのなかでも、「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。」をいつも、心に刻みつけて行ければ良いと思います。もっと、短く、「信仰、希望、愛」といつも口ずさんだらどうでしょう。

また、この御言葉は一年かけて、いろいろなかたちで共に学び、深めていきたいと願っています。そこで、今朝はすべてについての結論付けを行おうとは思いません。

この章は、愛について述べられている章であることについては、確認してきました。13 節には「一番すぐれているのは愛です」と断言されるほどに、愛 (アガペー) が大事だということが語られています。

そこで、今朝は一つだけ「愛」に関してのメッセージとしてお勧めしたいと思います。すなわち、それはヨハネの手紙第一 4 章にあります。

**「愛する者たち。私たちは互いに愛し合ひましょう。愛は神から出てい
るのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない
者に、神はわかりません。なぜなら、神は愛だからです。神はそのひと
り
子を世に遣わし、その方によって、私たちに、いのちを得させてくださ
い
ました。ここに神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛した
の
ではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物とし
ての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神
が
これほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちも互いに愛し
合うべきです。いまだかつて、だれも神を見たものはありません。もし
私
たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私た
ち
のうちに全うされるのです。」(ヨハネの第一の手紙 4 章 7~12 節)**

神の愛を実践するというのは難しいし、人間の側からはいくら絞り出そうとしてもそれはできないのです。ですから、御霊の神の助けをいただきながら、神の愛が究極的に示されている十字架のキリストをいつも覚えましょう。そこにこそ神の愛の本質があるからです。その上で、兄弟姉妹がお互いに愛し合うことを、心がけたいのです。まずは祈り合う

ことでしょう。そして、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者といっしょに泣きなさい」という御言葉にあるように、その喜びと悲しみを共有させていただきたいのです。そして、それが人間的なものにならないようにするために、その目的をしっかりとわきまえることです。つまり、私たちが互いに愛し合うことは、誰も見たことのない、「神を知る」ことが大きな目的であることを忘れないことです。第一ヨハネの文節には、「**愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされる**」とあります。人間関係の融和も大切ですが、それ以上に神との関係を深めることに鍵があることを、今朝も学びたいと思うのです。